

# 児童の自己指導能力を高める学級活動の工夫

## — 学級の仲間と共に作る「希望に満ちたもう一つの未来の計画（P A T H）」の作成を通して —

安芸高田市立愛郷小学校 波多野 八朗

### 研究の要約

本研究は、児童の自己指導能力を高める学級活動の工夫について考察したものである。所属校第5学年の児童は、全体的に学習意欲が低いとともに、夢や目標に向かう意欲がもてず、自己決定をすること、自己存在感（自己有用感）をもつこと、共感的人間関係を築くことを苦手としている実態がある。このような実態から、児童の自己指導能力に課題があることが分かり、自己指導能力を高めるための指導の工夫が必要であると考えた。文献研究から、学級活動の授業は、生徒指導の三機能を生かしながら自己指導能力を高めることが重要であることが分かり、学級活動の時間において、学級の仲間と共に、希望に満ちたもう一つの未来の計画（P A T H）を作成することで、児童の自己指導能力を高めることに有効であることが分かった。そこで、P A T Hの作成を中心とした授業を一つのプログラムとし、学級活動の模擬授業を、長期研修生を対象として行った。模擬授業後の長期研修生からの指摘を取り入れ、学習指導案を改善し、学級活動の指導の実際をD V Dに収録した。

### I 主題設定の理由

文部科学省「生徒指導提要」（以下、「提要」とする。）（平成22年）において、「各学校においては、生徒指導が、教育課程の内外において一人一人の児童生徒の健全な成長を促し、児童生徒自ら現在及び将来における自己実現を図っていくための自己指導能力の育成を目指す」という生徒指導の積極的な意義を踏まえ、学校の教育活動全体を通じ、その一層の充実を図っていくことが必要」<sup>1)</sup>であると示されている。

また、広島県教育委員会「令和2年度広島県教育資料」において、「児童生徒が自ら判断し、行動し、その結果に責任をもつという自己指導能力を育成することが生徒指導の目標である。」<sup>2)</sup>と示されており、自己指導能力を育成するためには、「自己決定の場を与える」「自己存在感を与える」「共感的人間関係を育成する」という三つの機能をあらゆる教育活動に生かすことが重要であるとも示されている。

このことに関して、坂本昇一（1998）は、自己指導の力を、「その時、その場で、どのような行動が適切か、自分で考えて、決めて、実行する能力」<sup>3)</sup>だと述べ、自己指導能力が育成されるための指導上の留意点として、「児童生徒に自己存在感を与えること」「共感的人間関係を育成すること」「自己決

定の場を与え自己の可能性の開発を援助すること」の三つを挙げている。

所属校第5学年に児童生活アンケート（令和元年12月）を行ったところ、次の表1の様な結果を得た。

表1 児童生活アンケート（抜粋）

項目	肯定的 回答の 割合(%)	学校 平均差
①「なぜだろう」「やってみたい」と思いながら、問題を解決しています。	71.0	-9.3
②自分から進んで役に立つ行動ができます。	60.5	-24.9
③グループやペアで話し合うと、勉強がよくわかります。	55.3	-30.6
④困ったときに相談のできる友だちがいます。	78.9	-4.9

このアンケート項目に関しては、先行研究において次の様な留意点が示されている。

表1の①について、静岡県藤枝市立高洲南小学校・坂本昇一（1990）は、「子どもたちは、勉強し

たがっている。疑問を持ったり、もっと追究したいことがあると、みずからが持っている知識を総動員して問題解決に取り組み出す。」<sup>4)</sup>と述べ、学習意欲が何よりも大事で、個人学習は自力で自分なりの考えを確立していく重要な自己決定の場だとも述べている。また、中央教育審議会中間まとめ（平成18年）では、「青少年の意欲を高め、心と体の相伴った成長を促す方策について」において、青少年期とは、将来の夢や希望を抱いて自己の可能性を伸展させる時期であり、目標の達成に向けて意欲をもつことが成長のための行動の原動力になると示されている。

表1の②について、櫻井茂男（平成25年）は、子供たちが他者に役立つような行動をし、それが他者に認められることによって自己有用感（「存在感」）が育つと述べている。

表1の③④について、津村俊充（2010）は、世界青年意識調査（1998）の「話合いの輪の中に気軽に参加する。」「自分と違った考えをもっている人とうまくやっていく。」などに対して否定的な回答が多い結果から、日本の青年期の対人行動の特徴を、積極的に関係をつくったり、葛藤を処理したりする人間関係力の弱さだと述べている。つまり、人に話しかけることができたり、話合いに参加できたりすることが、共感的人間関係の強さだと言える。

これらのことから、所属校当該学年の児童は、全体的に学習意欲が低いとともに、夢や目標に向かう意欲がもてていないと考えられ、自己決定をすること、自己存在感（自己有用感）をもつこと、共感的人間関係を築くことに課題があると考える。

「提要」では、生徒指導のねらいである自己指導能力や自己実現のための態度や能力の育成は、特別活動の目標と重なる部分もあると示しており、また、文部科学省国立教育政策研究所（2019）は、学級活動の特質に即し、自主的、実践的な活動を積み重ねることで、児童の自己指導能力を高めると示している。さらに、文部科学省国立教育政策研究所（2016）は、学級活動において、学級の一員としてそれぞれを尊重し合いながら共感的な人間関係を育て、意見を出し合い自己有用感や自己存在感を高めつつ、集団としての決定や自己決定をしていくと示している。

これらのことから、自己決定の場を与えること・自己存在感（自己有用感）を与えること・共感的な人間関係を育成することの三機能を生かした学級活動の工夫を行うことで児童の自己指導能力を育成す

ることができると考え、本主題を設定した。

## II 研究の基本的な考え方

### 1 学級の仲間

「提要」において、「集団指導を通して個を育成し、個の成長が集団を発展させるという相互作用により、児童生徒の力を最大限に伸ばすことができるという指導原理があります。」<sup>5)</sup>「個別的な指導を行うためには、それを可能とする学級づくりが大切です。児童生徒同士に仲間意識があり、ルールが遵守され、お互いを認め合い、思いやり、意欲と責任感を持ち、自己解決能力そして成就感・達成感のある学級づくりを目指して学級経営をしていくことが求められます。」<sup>6)</sup>と示している。

このことに関して、坂本（昭和59年）は、仲間集団は、仲間同士の横の人間関係から、仲間への貢献と仲間からの承認を得て心が安定すると述べ、また、上畠直久（2018）は、自己指導能力は、自己実現を図る上で欠かせない力であり、仲間と協力しながら課題を解決する取組に臨むことで、必要に応じて適切な選択や判断を行ったり、解決に向けて粘り強く取り組んだりすることが大切だと述べている。

これらのことから、学級の仲間との活動が、お互いに認め合える関係を築きながらお互いの成長を促すことにつながり、お互いの力を最大限に伸ばすことにつながると考える。また、仲間と協力しながら適切な選択や判断をし、課題の解決に粘り強く取り組むことが、児童の自己指導能力を最大限に伸ばすことにつながると考える。

### 2 希望に満ちたもう一つの未来の計画

「希望に満ちたもう一つの未来の計画」は、Planning Alternative Tomorrow with Hopeの日本語訳で、略称をP A T Hという。1991年にカナダにおいてForest氏らがインクルージョン教育を推進するための具体的な手立てとして開発したものである。

P A T Hのステップは次のとおりである。

1. 北極星（夢）にふれる  
(夢や希望について語ること)
2. ゴールを設定する・感じる
3. いまに根ざす  
(どこに私／私たちはいるのか)
4. 夢をかなえるために誰を必要とするのか
5. 必要な力を知る  
(必要な力とそれを増す方法は?)

- 6. 近い将来の行動を図示する
- 7. 一ヶ月後の作業を計画する
- 8. 初めの一歩を踏み出す

#### P A T Hのステップ（涌井恵（2009）を参考に稿者が作成）

P A T Hは、スマールステップでゴールに向かうこと、ゴールに向かうまでの過程に誰かの助けを必要とすること、本人を含め複数でシート（以下、「P A T Hシート」とする。）を作成することに特徴がある。

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所（平成26年）は、自分の夢や希望を中心に将来の計画を考えることや、自己決定の力をつけていくことは、障害のない児童にも有益なことであるとともに、「本人の願い」から「支援目標」を設定する際には、本人と関係の深い支援者が複数の目で検討して決めていくことが大切だと示している。

瀧川佳苗・鈴木俊太郎（2016）は、目標達成にスマールステップを用いる有効性を、状況を整理し、明確化できること、目標達成への動機づけが高まるここと、目標達成までの無理のない計画が立てられることから述べている。

干川隆（平成14年）は、P A T Hは、障害者本人とそれに関わる多くの人がその人の夢や希望に基づいてゴールを設定し、そのゴール達成のための作戦会議であると述べるとともに、P A T Hは、課題を明確にし、それに向けて話し合いをし、問題を解決していく課題解決型の方略だと述べている。また、干川（2017）は、P A T Hでは、対象となる人を中心に、その人に関わりのある人たちが、話し合いを行うことで連携協力関係を生み出すことができるとも述べている。

涌井（2009）は、P A T Hの実施に関する考察の中で、通常の学級で実施する場合は、事前にコアグループでP A T Hを実施しておくことや、子供の年齢に合わせて説明表現を考慮する必要性があるなどの課題を挙げている。

これらのことから、P A T Hは、障害のある児童だけではなく、P A T Hシートの表現やP A T Hシートの書き方の説明に配慮したり、事前のコアグループの活用やグループ学習への支援を検討したりすることなどで、通常の学級においても活用できると考える。また、生活や学習に困難さのある児童が複数いる当該学年は、本人と本人に関わる人が話し合いをしながら願いの実現への方策を考えたり、誰かの助けを必要としながらスマールステップで学習を進

めたりすることのできるP A T Hを活用する取組が、本人の願いの実現に効果的だと考える。さらには、夢や希望に向けて自己決定を重ね、対象となる人とその人に関わる人たちが話し合いながら課題解決を図り、自己存在感を感じたり共感的人間関係を育成したりすることのできるP A T Hの過程を活用することが、児童の自己指導能力の育成につながると考える。

### 3 キャリア教育とP A T H

中央教育審議会答申（平成28年）では、小・中・高等学校を見通したキャリア教育の充実のため、キャリア教育の中核となる特別活動について、小・中・高等学校を通じて、学級活動・ホームルーム活動に、一人一人のキャリア形成と実現に関する内容を位置付けるとともに、「キャリア・パスポート」の活用を検討することを示している。

小学校学習指導要領（平成29年告示）解説総則編では、「児童が、学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要としつつ各教科等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること。」<sup>7)</sup>と示すとともに、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善において、「児童が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を、計画的に取り入れるように工夫すること。」<sup>8)</sup>と示している。

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所（平成26年）は、「『キャリア』は単なる連続ではなく、これまでの自分をどう活かすのか、今後どう進むのかといった将来展望を含むものであるため、キャリアはこれまでを活かした現在における自己決定だけでなく、未来に向けての『ありたい』『なりたい』といった『願い』を含むものであると言えます。本人の価値観や自己決定、将来展望が大きく関係する『本人の願い』は、まさに『キャリア教育』の中核であると言えます。」<sup>9)</sup>と示している。

山口県教育委員会（平成30年）は、「生徒指導とキャリア教育は、ともに人格のよりよい発達を支援するという目的をもち、具体的なキャリア教育の取組は、生徒指導としても大きな役割を果たすなど、密接な関係にある。」<sup>10)</sup>と示している。

これらのことから、生徒指導の目的である自己指導能力の育成には、キャリア教育の視点を取り入れることが大切だと考える。また、キャリア教育の要

である特別活動、なかでも、学級活動で、キャリア教育の中核である「本人の願い」を実現させるために、願いの達成に向けての見通しを立てたり振り返ったりすることのできるP A T Hシートを6年間通して作成することで、「キャリア・パスポート」としての活用につながり、児童の自己指導能力の育成につながると考える。

現在、新型コロナウイルス感染症対策の現状を踏まえた学校教育活動が再開されている。長期間にわたり、この新たなウイルスとともに生きていかなければならぬ中で、新井立夫（2020）は、生徒指導の三機能が、新型コロナ禍後の「生きる力」の育成を目指した「主体的・対話的で深い学び」による授業を展開する場合において、生徒指導の側面から人格形成の場ということを再認識することが非常に大切であると述べ、今の学校教育には、寛大さと新しい生活様式に対する工夫が必要であり、何より学校は、自己指導能力を育成し、身に付けさせる場でなくてはならないと述べている。生徒指導の三機能を生かしながら自己指導能力の育成につながるP A T Hの活用は、「After」コロナの社会においても有効な学習活動だと考える。

### III 研究の仮説及び検証の視点と方法

#### 1 研究の仮説

学級活動の時間において、生徒指導の三機能を取り入れた「希望に満ちたもう一つの未来の計画（P A T H）」を作成する活動等を実施すれば、児童の自己指導能力を高めるものになるであろう。

#### 2 検証の視点と方法

検証の視点と方法について、表2に示す。

表2 検証の視点と方法

検証の視点	検証の方法
模擬授業において、P A T Hシートの活用が、自己指導能力を高めるための生徒指導の三機能を取り入れたものになっていたか。	模擬授業後における長期研修生授業評価表・学級活動アンケートの回答による分析 ○指導者の立場として、P A T Hシートを活用した授業に生徒指導の三機能が取り入れられていたか。 ・自己決定の場を与える ・自己存在感を与える ・共感的人間関係を育成する ○指導者の立場として、P A T Hシートを活用した授業に生徒指導の三機能が取り入れられていたか。 ・自己決定の場を与える ・自己存在感を与える ・共感的人間関係を育成する

	トを活用した授業は、肯定的に自己を振り返ることができていたか。
--	---------------------------------

検証は、模擬授業において実施する。長期研修生が児童役になり、指導者の立場から、「P A T Hシートの活用が、自己指導能力を高めるための生徒指導の三機能を取り入れたものになっていたか」の視点を、授業評価表と学級活動アンケートによって検証する。

授業評価表の各要素（生徒指導の三機能）とそれに係る質問については、池田隆・北野和則（平成24年）「自ら学ぶ意欲を育む生徒指導の在り方に関する研究－生徒指導の三機能を生かした学習指導法の開発と評価を通して－」、笠岡市教育委員会（2013）「生徒指導の三機能を具現化するための教師の手立て～『自己決定』・『自己存在感』・『共感的人間関係』～」、岩手県立総合教育センター（平成19年）「授業における生徒指導」を参考にして作成し、実施する。

学級活動アンケートの各要素（生徒指導の三機能・自己を振り返る）とそれに係る質問については、茨城県教育研修センター（平成18年・19年）

「生徒指導に関する研究『児童生徒が自己指導能力を高める学校支援体制の在り方』」を参考にして作成し、実施する。

授業評価表・学級活動アンケートの質問については、4段階評定尺度法で点数化し、分析する。授業評価表の質問項目を表3に示し、検証も含めた研究の計画を表4に示す。

表3 授業評価表の質問項目

生徒指導の三機能	生徒指導の三機能を生かす手立て（質問項目）
自己決定の場を与える	1 児童が興味・関心をもち、主体的に学ぼうとするように、資料や教材提示の方法を工夫している。
	2 児童一人一人に学習の目標やめあてをもたせる。
	3 思考過程や課題解決の過程が分かるように、ノートやワークシートの書き方を指導している。
	4 自分の考えを書いたり、発表したりする場面を設けている。
	5 一人調べを取り入れたり、一人で考えたりする時間を十分に与えている。
	6 児童が今日の学習を振り返り、これからの学習について考えるような場を設けている。
自己存在感を与える	7 児童一人一人がチャレンジできる場を設けている。
	8 すべての児童に発表の機会や活躍する場を保障している。
	9 児童が協力して学習できるように、ペア学習やグループ学習などを取り入れている。
	10 グループで協力しなければ解決できない学習課題を設定している。
	11 多様な考えを提示して、お互いの考えに気付かせる工夫をしている。
	12 つまずきや誤答などを肯定的に取り上げ、課題解決の方法を考する上で、みんなのためになつたことを評価している。

共感的人間関係を育成する	13	児童の発表に対して、うなずきや相づちで応え、共感的に受け入れている。
	14	良い姿やがんばっている姿はほめ、好ましくない行動については正すことを心掛けている。
	15	相互評価など、お互いの良さを認め合う活動を取り入れている。
	16	児童一人一人のがんばりを認めるとともに、間違いを言えるようしている。
	17	児童一人一人を受け入れてほめ、児童の人間性を認めるようしている。
	18	友だちの発表に対しては、発表者の方を向いて聴かせたり、拍手をしたりするような雰囲気づくりを行っている。
	19	ペア学習やグループ学習で、課題解決に向けて教え合いの場面を設定している。

表4 研究の計画

次	研究内容	実施日
1	学習指導案作成と教材の作成	6月
2	模擬授業	6月23日
3	模擬授業検討会	6月23日
4	学習指導案と教材の改善	7月
5	DVDの作成	8月

本研究のゴールを校内研修や授業実践で活用できるDVDの作成にする。模擬授業実施後に、模擬授業検討会を行い、長期研修生から改善案をもらう。その後、学習指導案と教材を改善し、研究の検証をする。検証結果を分析した後、DVDの作成に取り掛かる。DVDには、模擬授業の映像も含め、学習指導案や教材も取り入れ、多くの方が活用できるものにする。

## IV 模擬授業

### 1 模擬授業の内容

- 実施日 令和2年6月23日（火）
- 対象 令和2年度長期研修生（10名）
- 題材名 仲間と作ろう、My ドリームプラン
- 目標
  - ・将来に関わる情報を知り、働くことの意義を理解することができる。
  - ・将来の夢や目標の達成に向けて必要なことについて話し合い、自分に合った実践ができる。

### 2 模擬授業の概要

自己指導能力を高める「PATH」を活用した授業を、図1のとおり、学級活動アンケート、PATH導入の授業、中の活動、PATH作成の授業、PATH振り返りの授業、継続指導、キャリアノートの記入を組み合わせて構成し、プログラムとした。プログラムの中から、特別活動①と②の授業を模擬授業として実施した。

PATH振り返りの授業、継続指導、キャリアノートの記入を組み合わせて構成し、プログラムとした。プログラムの中から、特別活動①と②の授業を模擬授業として実施した。

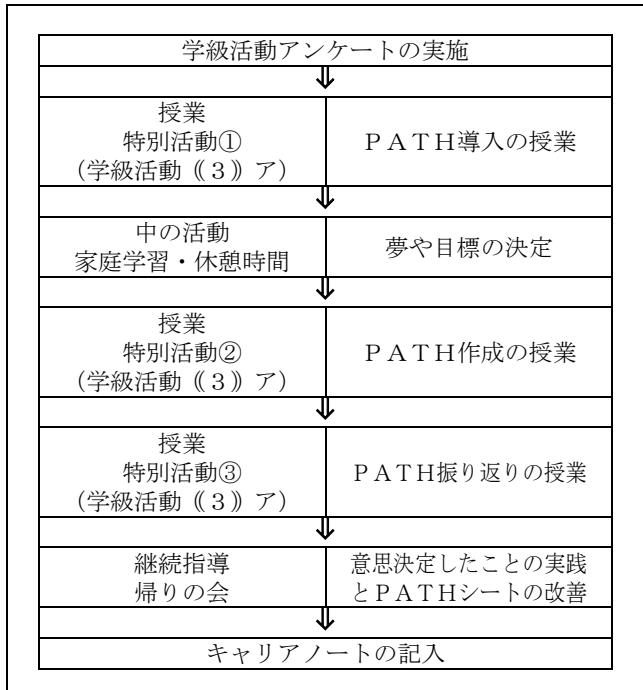


図1 自己指導能力を高める「PATH」を活用した授業に係るプログラム

詳細な模擬授業の流れについて図2に示す。

特別活動①	教材名：学級活動（3）ア
	題材名：仲間と作ろう、My ドリームプラン
	目標：将来に関わる情報を知り、働くことの意義を理解することができる。
	つかむ アンケートの結果を提示し、課題意識をもたせる。
	さぐる・見つける ○ 将来に関わる情報をクイズ形式にしてグループで考えさせ、働くことや職業への興味をもたせる。 ・全国の小・中学生、高校生の将来の夢 ・10年後になくなるかもしれない仕事 ・1ヶ月にかかる生活費
	○ 補足説明を加えながらクイズの答えを伝えることで、夢や目標をもつことに共感させたり、10年後の仕事が自分たちに関わる課題であることに気付かせたり、働くことの大切さに気付かせたりする。
	決める 本時の感想を書かせ、本時の導入で予想したことと比較しながら、本時の学びを実感させる。
	教材名：学級活動（3）ア
	題材名：仲間と作ろう、My ドリームプラン
	目標：将来の夢や目標の達成に向けて必要なことについて話し合い、自分に合った実践ができるようにする。
	つかむ ○ ユーチューバーを例にして、PATHシートの書き方を説明し、学習への興味をもたせる。

特別活動②	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ PATHシート作成のポイントを伝え、友だちと一緒に活動しやすい雰囲気を作る。 さぐる・見つける</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ PATHシートの「必要な力・現在の自分」を次のような順番で書かせる。           <ul style="list-style-type: none"> <li>・タブレットを活用して情報収集をさせる。</li> <li>・グループの友だちから情報収集をさせる。</li> <li>・グループでウェビングマップを活用して情報を広げさせる。</li> </ul> </li> <li>○ PATHシートの「ゴール」「近い未来」「1ヶ月後」「必要な人」を次のような順番で書かせる。           <ul style="list-style-type: none"> <li>・個人で考えた後に、グループで一人一人のシートを考えさせる。</li> <li>・他のグループのシートを見に行く時間をとり、自分のシートの参考にさせる。</li> </ul> </li> </ul> <p><b>決める</b> グループのメンバーと考えてきたことを生かして、PATHシートの「はじめの一歩」を書かせる。</p>
	・模擬授業後の授業評価表と学級活動アンケートの実施
	・模擬授業検討会

図2 模擬授業の流れ

## V 模擬授業の分析と考察

自己指導能力について、模擬授業実施後に「授業評価表」と「学級活動アンケート」を用いて検証した。「学級活動アンケート」については、児童対象のアンケートであるため、検証の参考にとどめ、授業評価表の結果を表5・6に示す。

表5 肯定的評価100%の項目（授業評価表）

生徒指導の三機能	生徒指導の三機能を生かす手立て（質問項目）	
自己決定	1	児童が興味・関心をもち、主体的に学ぼうとするように、資料や教材提示の工夫をしている。
	3	思考過程や課題解決の過程が分かるように、ノートやワークシートの書き方を指導している。
	6	児童が今日の学習を振り返り、これから学習について考えるような場を設けている。
自己存在感	9	児童が協力して学習できるように、ペア学習やグループ学習などを取り入れている。
	11	多様な考えを提示して、お互いの考えに気付かせる工夫をしている。
共感的人間関係	13	児童の発表に対して、うなづきや相づちで応え、共感的に受け入れている。
	14	良い姿やがんばっている姿をほめ、好ましくない行動については正すことを心掛けている。
	15	相互評価など、お互いの良さを認め合う活動を取り入れている。
	16	児童一人一人のがんばりを認めるとともに、間違いを言えるようにしている。
	17	児童一人一人を受け入れてほめ、児童の人間性を認めるようにしている。

	19	ペア学習やグループ学習で、課題解決に向けて教え合いの場面を設定している。
--	----	--------------------------------------

表6 肯定的評価80%以下の項目（授業評価表）

生徒指導の三機能	生徒指導の三機能を生かす手立て（質問項目）	
自己決定	5	一人調べを取り入れたり、一人で考えたりする時間を十分に与えている。
自己存在感	10	グループで協力しなければ解決できない学習課題を設定している。
共感的人間関係	18	友だちの発表に対しては、発表者の方を向いて聴かせたり、拍手をしたりするような雰囲気づくりを行っている。

表5から、PATHを活用した授業は、資料提示の工夫やPATHシートの書き方の指導、振り返りの場の設定などが、自己決定の場を与えることには効果的である。ペア学習やグループ学習、お互いの考えに気付かせる工夫などが、自己存在感を与えることには効果的である。お互いの良さを認め合う活動や教え合う場面の設定、共感的な姿勢などが、共感的人間関係の育成に効果的であることが分かる。

これらのことから、PATHを活用した授業が、生徒指導の三機能を生かすことにつながり、自己指導能力の育成に効果があると考える。

表6から、PATHを活用した授業は、自己の活動を振り返る時間を充分に確保したり、グループに課題解決を委ねたりすることも大切で、PATHシートや指導者の手立てにさらなる改善を加えていく必要があると考える。また、自由に意見を出しやすい雰囲気の中で話し合いをする際に、改めて相手を大切にできる接し方も考えさせていく必要があると考える。

本年度は、所属校での研究授業が実施できず、学級活動アンケートの対象が児童ではないこと、プログラム全体の実施ができなかったことから、実際、児童の自己指導能力の育成に効果があったかを検証することはできなかったが、模擬授業で児童役を行った長期研修生からは、PATHの活用に関わり、夢や目標をもたせる場面での資料選定や資料提示の流れ、PATHシートの系統性や簡素化、生徒指導の三機能に係る指導者の支援の見える化、個に応じた指導などの工夫が求められた。そこで、PATHの活用のための指導者の支援と生徒指導の三機能とのつながりを再整理し、模擬授業後に改善した学習指導案、教材等、題材に係る一式についてもDVD

に収録した。この改善した学習指導案の一部を図3に示す。

	児童の活動	指導上の留意点 【生徒指導の三機能】	資料	◎目指す 児童の姿 【観点】 【評価方法】
導入 つかむ 〔10〕	<p>1 画像を見ながら本時のめあてを知る。</p> <p>友だちと相談しながら、夢や目標に向けての一步をふみ出そう。</p> <p>2 My ドリームプランを確認する。</p> <p>①幸せの一一番星 ②必要な力・どんな人 ③現在の自分 ④ゴール ⑤近い将来 ⑥1ヶ月後 ⑦はじめの一歩 ※必要な人</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ユーチューバーを例に紹介し、学習への興味をもたせる。</li> </ul> <p>自己存在感 共感的人間関係</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「幸せの一一番星」については、事前に書かせておく。</li> <li>・My ドリームプランを作成する際のポイントを提示し、友だちと一緒に活動しやすい雰囲気を作る。</li> <li>・困ったときにはグループでアドバイスをしあうように助言するとともに、「困った」や「わからない」とグループ内で言えることを評価し、グループのメンバーが友だちの困っていることに気付けることの大切さを伝える。</li> <li>・My ドリームプランには、グループのメンバーの名前を書く欄を設け、友だちとともに作成することを意識させる。</li> <li>・自己存在感 共感的人間関係</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ユーチューバーのパワーポイント</li> </ul>	
展開 さぐる 〔35〕	<p>3 My ドリームプランの「必要な力・どんな人」と「現在の自分」を考える。</p> <p>○グループでメンバー一人一人のMy ドリームプラン作成のための情報を集める。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・My ドリームプランの①から③までの書き方を説明し、学習の見通しをもたせる。</li> <li>・自己決定</li> <li>・グループ学習等を活用してもMy ドリームプラン作成のための情報が出にくい場合は、適宜全体に紹介し、みんなで考える時間をとる。</li> <li>・自己決定</li> <li>・自己存在感 共感的人間関係</li> <li>・グループのメンバーの夢や目標に対して、ウェビングマップを活用して、「必要な力・どんな人」の情報を広げさせる。</li> <li>・自己決定</li> <li>・自己存在感 共感的人間関係</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・My ドリームプランのパワーポイント</li> <li>・My ドリームプラン</li> <li>・ウェビングマップ</li> <li>・タブレット</li> </ul>	

図3 学習指導案の例

学習指導案については、生徒指導の三機能と指導上の留意点を関連付けた手立てを明記することで、指導の視点を明確にした。

DVDの概要について次に示す。

タイトル：児童の自己指導能力を高める学級活動の工夫
【内容】
1 学習指導案 (PDF)
2 授業動画
3 授業材料 (PDF)

<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業評価表</li> <li>・学級活動アンケート</li> <li>・ワークシート</li> <li>・PATHシート (My ドリームプラン)</li> <li>・パワーポイント</li> </ul> <p>4 PATH活用のための指導者の支援と生徒指導の三機能とのつながり (PDF)</p>
---

## DVDの概要

## VI 研究のまとめ

### 1 研究の成果

- PATHを活用した授業は、指導者の支援によって生徒指導の三機能を意図的に取り入れやすく、自己を肯定的に振り返ることにつながることが分かった。
- 児童のキャリア形成を目指すために、事前指導から事後の継続指導までを一つのプログラムにし、個々のゴールに向けた継続的な取組ができることが分かった。

### 2 研究の課題

- 本年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により、所属校での研究授業が実施できなかったため、自己指導能力を高める「PATH」を活用した授業に係るプログラムを、実際に児童を対象に実施し、検証する必要がある。
- 児童の夢や目標に向けてのステップを継続するため、小中連携を見越した取組が必要である。

## VII 今後の取組

今後は、所属校において、自己指導能力を高める「PATH」を活用した授業に係るプログラムを実施する。検証の視点と方法について表7に示す。

表7 検証の視点と方法

検証の視点	検証の方法
児童の自己指導能力を高めることができたか。	検証授業の事前・事後と継続指導後における学級活動アンケートの回答による比較・分析

学級活動アンケートは、4段階評定尺度法で点数化し、生徒指導の三機能及び「自己を振り返る」についての平均値を比較する。

検証後は、本研究の課題に挙げた小中連携を見越した取組、学年段階に応じた活用方法等を研究し、児童の自己指導能力を高めることに継続して取り組

んでいきたい。

## 【引用文献】

- 1) 文部科学省（平成22年）：『生徒指導提要』教育図書 p. 1
- 2) 広島県教育委員会（令和2年）：『広島県教育資料』 p. 110
- 3) 坂本昇一（1998）：『生徒指導の機能と方法』文教書院p. 11
- 4) 静岡県藤枝市立高洲南小学校・坂本昇一（1990）：『子どもに感動を与える生徒指導の実践－生活・授業・集会活動－』文教書院p. 89
- 5) 文部科学省（平成22年）：前掲書p. 14
- 6) 文部科学省（平成22年）：前掲書p. 161
- 7) 文部科学省（平成30年）：『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説総則編』東洋館出版社p. 101
- 8) 文部科学省（平成30年）：前掲書p. 87
- 9) 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所（平成26年）：『特別支援教育充実のためのキャリア教育ガイドブックキャリア教育の視点による教育課程及び授業の改善、個別の教育支援計画に基づく支援の充実のために』ジニアース教育新社p. 116
- 10) 山口県教育委員会（平成30年）：『よりよい生徒指導に向けて』p. 10https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/cmsdata/e/c/8/ec8566f8eef3c23cb43632959b0a34d3.pdf（最終アクセス令和2年7月20日）

## 【参考文献】

- 広島県教育委員会（令和2年）：『広島県教育資料』
- 坂本昇一（1998）：『生徒指導の機能と方法』文教書院
- 静岡県藤枝市立高洲南小学校・坂本昇一（1990）：『子どもに感動を与える生徒指導の実践－生活・授業・集会活動－』文教書院
- 中央教育審議会（平成18年）：『青少年の意欲を高め、心と体の相伴った成長を促す方策について（中間まとめ）』
- 櫻井茂男（平成25年）：「『自己有用感』に関する調査・研究の重要性について－心理学の立場から－」『高めよう！自己有用感～栃木の子どもの現状と指導の在り方～』栃木県総合教育センターp. 1http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/cyosa/cyosakenkyu/h24\_jikoyuyukan/
- 津村俊充（2010）：「グループワークトレーニングーラボラトリ方式の体験学習を用いた人間関係づくり授業実践の試みー」『教育心理学年報49巻』pp. 171-179https://www.jstage.jst.go.jp/article/arepj/49/0/49\_0\_171/\_article/-char/ja（最終アクセス令和2年7月16日）
- 文部科学省（平成22年）：『生徒指導提要』教育図書
- 文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター（2019）：『特別活動指導資料みんなで、よりよい学級・学校生活をつくる特別活動（小学校編）』文溪堂
- 文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター（2016）：『学級・学校文化を創る特別活動中学校編』東京書籍
- 坂本昇一（昭和59年）：『小学校生徒指導の新展開』文教書院
- 上畠直久（2018）：「自己指導能力を育む『社会に開かれた教育課程』の構想～キャリア教育の視点から行うカリキュラム・マネジメント～」『京都産業大学教職研究紀

要第13号』pp. 71-90https://ksu.repo.nii.ac.jp/?action=repository\_uri&item\_id=10006&file\_id=22&file\_no=1（最終アクセス令和2年7月16日）

涌井恵（2009）：「本人中心アプローチによる障害のある子どもの支援の輪作りに関する事例報告－小学生へのP A T H（Planning Alternative Tomorrow with Hope）の実施－」『教育相談年報第30号』国立特別支援教育総合研究所pp. 1-6http://www.nise.go.jp/kenshuka/josa/kankobutsu/pub\_d/d-284/d-284\_01.pdf（最終アクセス令和2年7月16日）

瀧川佳苗・鈴木俊太郎（2016）：「スマールステップ方略が目標達成に及ぼす影響－スケーリング・クエスチョンを用いたスマールステップ方略の提案－」『信州心理臨床紀要Vol. 15』pp. 23-34https://soar-ir.repo.nii.ac.jp/?action=repository\_uri&item\_id=18701&file\_id=65&file\_no=1（最終アクセス令和2年7月16日）

干川隆（平成14年）：「教師の連携・協力する力を促すグループワーク－P A T Hの技法を用いた試みの紹介－」『一般研究報告書『知的障害養護学校における個別の指導計画とその実際に関する研究』』国立特殊教育総合研究所知的障害教育研究部重度知的障害教育研究室pp. 43-46https://www.nise.go.jp/cms/resources/content/7411/b-166.pdf（最終アクセス令和2年7月16日）

干川隆（2017）：「夢の実現に向けた個別の教育支援計画の作成演習－P A T Hシミュレーションの効果－」『熊本大学教育実践研究第34号』pp. 19-26https://kumadai.repo.nii.ac.jp/?action=pages\_view\_main&active\_action=repository\_view\_main\_item\_detail&item\_id=29806&item\_no=1&page\_id=13&block\_id=21（最終アクセス令和2年7月16日）

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所（平成26年）：『特別支援教育充実のためのキャリア教育ガイドブックキャリア教育の視点による教育課程及び授業の改善、個別の教育支援計画に基づく支援の充実のために』ジニアース教育新社

中央教育審議会（平成28年）：『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』

新井立夫（2020）：「これからのかの“授業”における生徒指導」『月刊生徒指導8月号第50巻第9号』学事出版pp. 14-19

池田隆・北野和則（平成24年）：「自ら学ぶ意欲を育む生徒指導の在り方に関する研究－生徒指導の三機能を生かした学習指導法の開発と評価を通して－」『研究紀要第39号』pp. 25-42広島県立教育センター

笠岡市教育委員会（2013）：「生徒指導の三機能を具現化するための教師の手立て～『自己決定』・『自己存在感』・『共感的人間関係』～」http://www.kasaoka-ed.jp/common/UserFiles/files/miryoku03.pdf（最終アクセス令和2年7月16日）

岩手県立総合教育センター（平成19年）：「授業における生徒指導」『平成19年度中学校初任者研修講座』http://www1.iwate-ed.jp/kensyu/siryou/h19/h19\_105sts.pdf（最終アクセス令和2年7月20日）

茨城県教育研修センター（平成18年・19年）：「生徒指導に関する研究『児童生徒が自己指導能力を高める学校支援体制の在り方』」『研究報告書第64号』http://www2.center.ibk.ed.jp/contents/kenkyuu/houkoku/pdf/64\_seitoshidou.pdf（最終アクセス令和2年7月20日）